熊取町埋蔵文化財調査報告書第６集

東円寺跡発掘調査概要・II

－ ８７年－５区の調査 －

１９８８年９月

熊取町教育委員会

はしがき

熊取町は、古くから熊取野として世に知られ、中世以降には多くのため池が築かれた農業先進地として発展し、数々の歴史に彩られてきました。

町域にはその歴史の足跡を克明に刻んだ遺跡が散在し、そこには先人の生活の記録である貴重な遺構遺物が埋蔵されています。

本町教育委員会では、このたび東円寺跡の開発にかかる申請者のご理解、ご協力を得て受託事業による埋蔵文化財の発掘調査を実施し、ここにその成果品として概要報告書を作成する運びとなりました。

本書が、私たち祖先の人たちの生活を知る上で、また、熊取の歴史の一端を明らかにするためにも、その資料として少しでも役立てばと念願する次第であります。

なお、今回の調査に関し、全面的なご協力を賜わりました大阪いずみ市民生活協同組合並びに現地での調査及び本書の作成等にご尽力、ご教示をいただきました各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和63年9月

熊取町教育委員会

教育長　山中長正

例　　言

1．　本書は、熊取町教育委員会が、昭和62年度及び63年度に実施した東円寺跡の調査概要報告書である。

2．　調査は、熊取町教育委員会発掘調査嘱託員井田　匡を担当者として、昭和63年2月15日に着手し、昭和63年5月31日終了した。

3．　調査に要した費用は大阪いずみ市民生活協同組合の負担によるものである。

4．　調査の実施と整理にあたっては、小橋秀行、岩根幹一、二反田茂樹、久世公一、大宅一紀、幸前和裕、樫元勝人、岩倉博、井手口大作、腕野登志、富村伊都子、小田貴子、浅野佳子、二反田美幸、辻本栄子、安福佳代の諸氏の協力を受けた。また、大阪いずみ市民生活協同組合・泉洋建設株式会社・竹口文化財土木工業所並びに関係各位より多大な協力を得た。特に大阪いずみ市民生活協同組合管理局開発部坂田　明氏には調査終了までになにかとご尽力いただいた。明記して感謝の意を表したい。

5．　本書中の標高は、東京湾平均海水面を基準とし、方位は、地図以外は磁北を示すものとした。

6．　本書の執筆及び編集は、井田がおこない、遺物観察表は、富村が作成した。

7．　調査にあたっては、写真・実測図等の記録を作成するとともにカラースライドを作成した。広く利用されることを望む。

目　　次

第　1　章　　沿　　革

第　1　節　位置と環境 …… 1

第　2　節　既往の調査 …… 1

第　3　節　調査に至る経過 …… 2

第　4　節　地区の名称および遺構の呼称について …… 3

第　2　章　　調査の成果

第　1　節　遺跡の概要 …… 3

第　2　節　遺構と遺物 …… 6

第　3　節　出土遺物 …… 9

第　3　章　　ま　と　め …… 13

図　版　目　次

図版第 1　　調査地全景

図版第 2　　ＳＤ－１・ＳＤ－２・ＳＤ－３検出状態

図版第 3　　ＳＤ－１・ＳＢ－２検出状態

図版第 4　　調査地全景（上が北），遺構検出状態（東から）

図版第 5　　出土遺物（１）

図版第 6　　出土遺物（２）

図版第 7　　出土遺物（３）

図版第 8　　周辺の遺跡

挿 図 目 次

第 1 図　熊取町の位置 …… 1

第 2 図　調査地位置図 …… 2

第 3 図　東円寺跡87年－5区調査地区割図 …… 3

第 4 図　東円寺跡87年－5区土層模式図 …… 4

第 5 図　東円寺跡87年－5区平面図 …… 5

第 6 図　東円寺跡87年－5区周辺調査区平面図 …… 6

第 7 図　東円寺跡87年－5区ＳＤ－2断面図 …… 7

第 8 図　ＳＤ－1出土遺物（1） …… 9

第 9 図　ＳＤ－1出土遺物（2） …… 10

第 10 図　ＳＤ－1出土遺物（3） …… 10

第 11 図　Pit1・2出土遺物 …… 11

第 12 図　東円寺跡87年－5区包含層の遺物 …… 12

表 目 次

第 1 表　遺物観察表 …… 15～16

東円寺跡発掘調査概要・Ⅱ

第1章　沿　　革

第1節　位置と環境

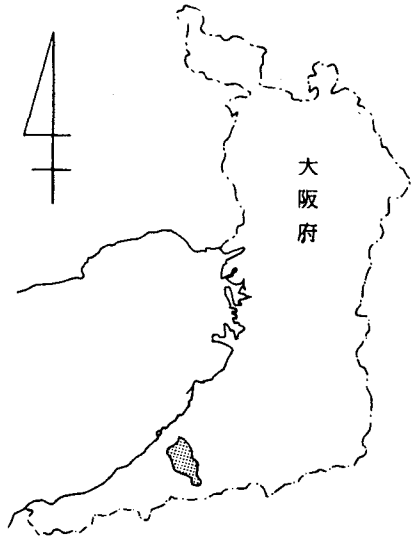
東円寺跡は、大阪府泉南郡熊取町大字野田に所在し、熊取町公民館周辺に位置している。付近の地形は埋積谷と段丘面で構成されており、標高は海抜32ｍから40ｍを測る。

遺跡の範囲は、北は大原池、南は大井出川・住吉川、西は口無池、東は町立中央小学校東側の段丘までで、東西900ｍ、南北400ｍの広がりを持つ、奈良時代から江戸時代にかけての寺院跡と集落遺跡である。

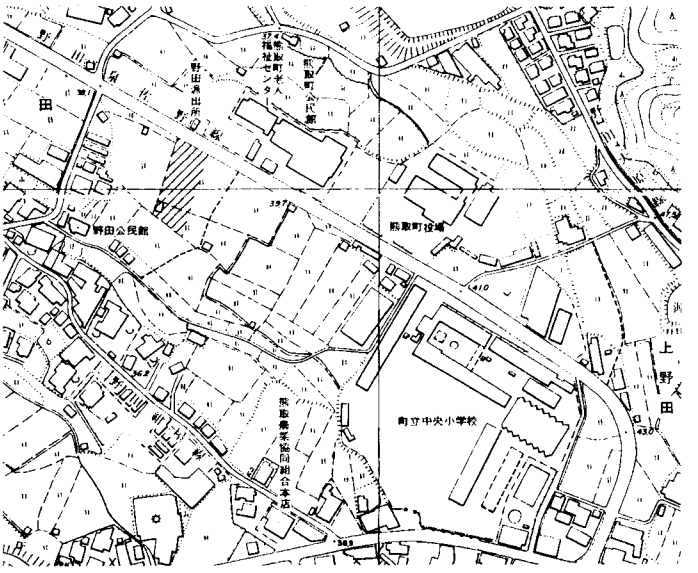
東円寺跡の存在する大井出川・住吉川流域には、他にも遺跡が多く存在しており、熊取町内では大浦中世墓地・口無池遺跡・紺屋遺跡・大久保Ｂ遺跡・大久保Ｄ遺跡が存在する。更に下流の泉佐野市域では、山出遺跡・檀波羅蜜寺・井原の里遺跡・湊遺跡などが存在する。大井出川・住吉川流域周辺では、新たに遺跡が発見される可能性は極めて高く、その位置と範囲の確定は今後の課題である。

第2節　既往の調査

東円寺跡は、昭和52年発行の大阪府文化財分布図にその位置と範囲が初めて掲載された。遺跡となったのは範囲内で古瓦などの遺物が多量に散布していることと寺に関係する小字名と考えられる大門・どぶ池（堂の池）・豊寺・東曜寺・東円寺・堂の後などの小字名を持つ水田が、一カ所に集中して存在することから遺跡として取り扱われることとなった。(1)



第1図　熊取町位置図



第2図　調査地位置図

東円寺跡での既往の調査としては、範囲内を東西に横切る外環状線の建設に伴い、大阪府教育委員会によって、昭和57年から59年の間に3次にわたる調査が実施[(2)(3)(4)]された。また、熊取町教育委員会でも消防署の建設に伴う調査をはじめ、個人住宅の建築に伴い数次にわたって、発掘調査を実施してきた[(5)(6)(7)]。その結果として、平安末期の創建と伝わる寺そのものに関係する遺構は、未だ検出されてはいないが、奈良時代から近世までの建物跡・柱穴群・水田・畑・灌漑用の水路などの遺構を検出しており、寺の存在を窺わせる瓦や多種多様な遺物が出土し、東円寺（跡）を支えていたと思われる『経済基盤』としての集落の存在を裏付ける資料が既往の調査によって得られている。

第3節　調査に至る経過

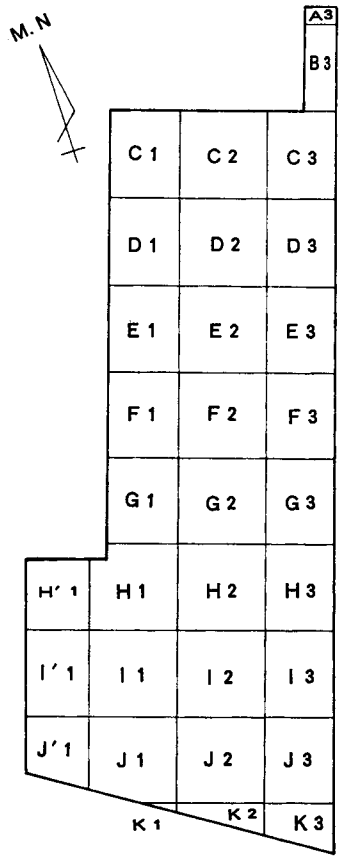
熊取町大字野田2322－3番地において、大阪いずみ市民生活協同組合が店舗の建築を計画し、昭和62年12月28日付で文化庁に土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘届出書が提出された。そののち、熊取町教育委員会に昭和63年1月6日付で、埋蔵文化財包蔵地の存在確認調査依頼書が提出された。

これを受けて、熊取町教育委員会では同年1月18日に、機械により試掘調査を実施し、遺構及び遺物包含層を確認した。この調査に基づき遺跡の取り扱いについて、熊取町教育委員会と大阪いずみ市民生活協同組合の双方で協議を重ねた結果、遺跡の重要性に鑑み調査を実施することで合意した。

第4節　地区の名称と遺構の呼称について

調査地内では、5ｍ四方の調査地区の地区割りを実施した。南北方向は、アルファベットによる地区名で呼称し、A・B・C・Dと表すこととした。東西方向は、アラビア数字による地区名で呼称し、1・2・3・4と表すこととする。本書中でも遺構の位置等の表し方は、これに準じて、A1、B2と表すこととする。また、今回の調査地での南北の基準線は東へ20°ふっている。

更に、調査を実施する際に遺構については、検出した順に遺構の略称と番号を組み合わせて呼称することとした。略称は溝をSD、柱穴をPit、建物跡をSB、柵列・杭列をSA、土壙・焼土壙をSK、その他の遺構をSXと呼称したが、本書中でもこれに準じてSD－1、SD－2と呼称することとする。



第3図調査区地区割り図

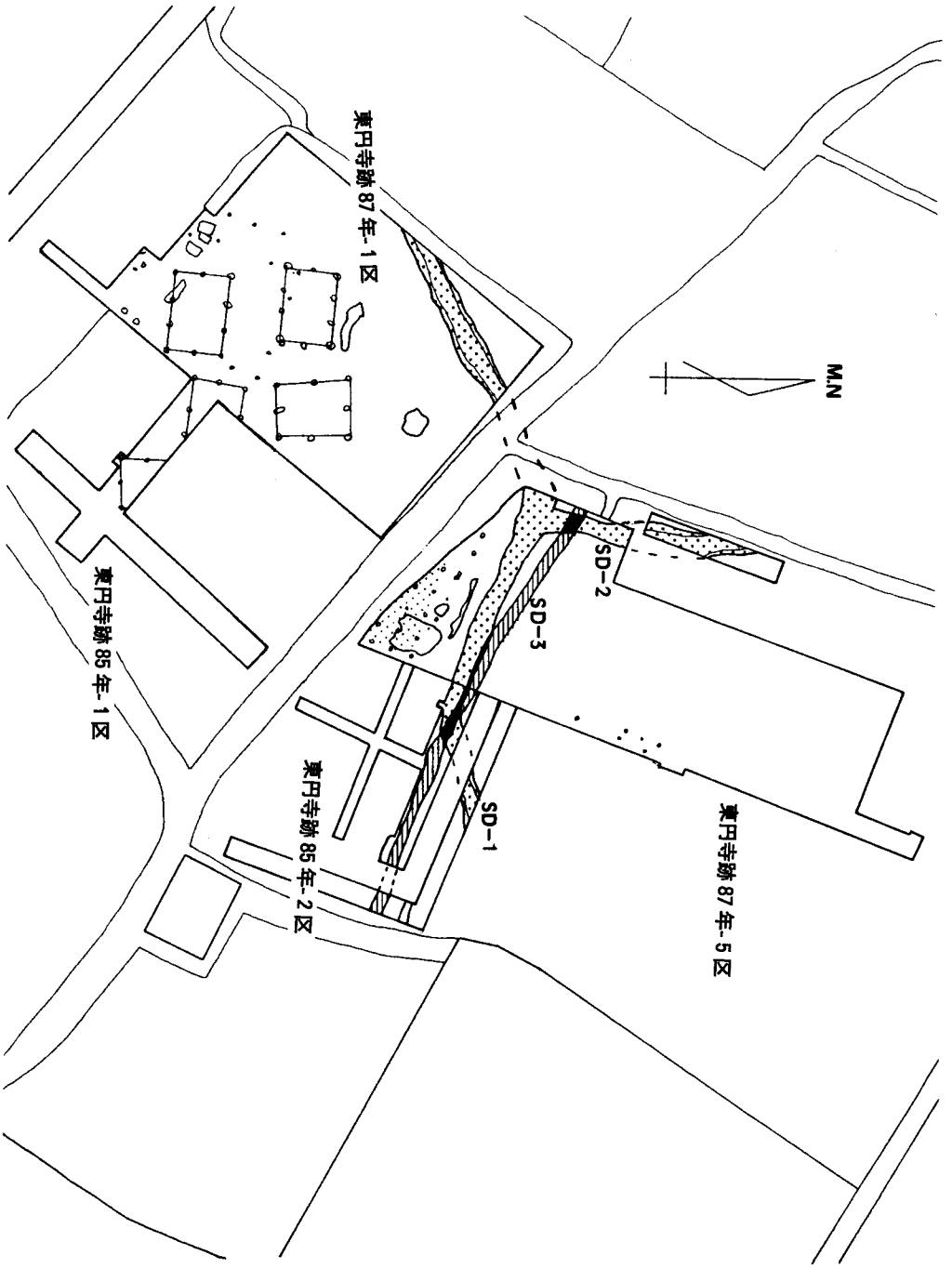
第2章　調　査　の　成　果

第1節　遺跡の概要

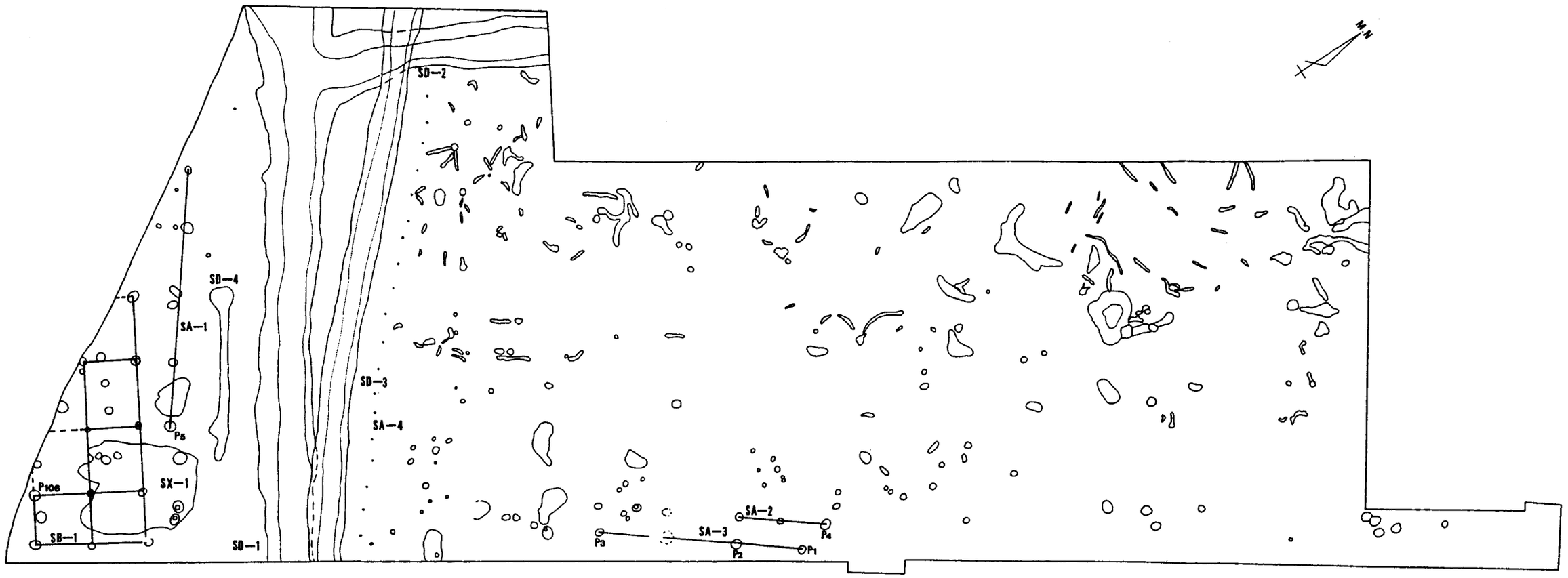
調査を実施した地点は、小字名では、か福寺・堂の後と呼ばれる地点であり遺跡範囲のほぼ中心である。現状は水田で、地表面のレベルは周囲の水田より、約40㎝程高い。当該地では昭和60年にすでにトレンチによる調査を実施しており、溝や柱穴なども検出している(8)。

検出した遺構としては、溝が4条、柵列が3列、杭列が1列、中世の建物が1棟、不整形土壙を1基検出し、柱穴や鍬跡も多数検出した。

遺物は総体的にみて少ない量であったが、主に11世紀から14世紀までのもので、遺構に伴う遺物が多かった。ただ近世の遺物が極端に少ないことから近世以降に削平をうけているものと思われる。以下遺構及び遺物について



第4図　周辺調査区平面図



第5図　東円寺跡87年－5区平面図
1／3縮尺(オリコミ図)

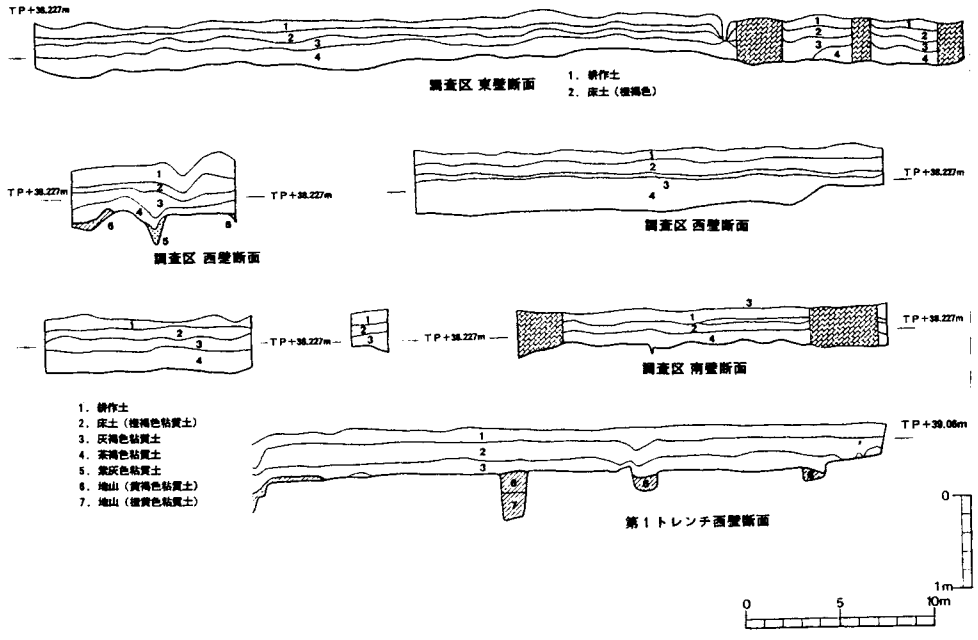
述べることとする。

第2節　遺構と遺物

①　溝　ＳＤ－１

ＳＤ－１は、調査区Ｉ１からＩ３にかけて、東から西に流れる幅1.8ｍ、深さ50㎝の溝である。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては、土師器・須恵器・瓦器・東播系こねばち・紀州系の羽釜などの遺物のほかに赤茶色に焼けた瓦などが出土している。

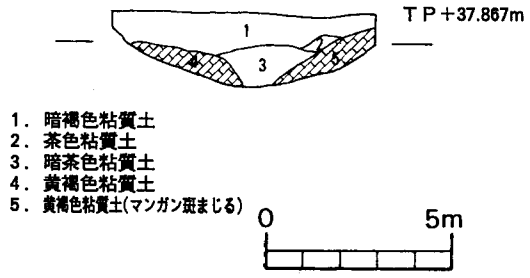
ＳＤ－１の底では、石や瓦が溜まっていたが、これらは、自然に堆積したものではなく溝が埋まる時点で混入したものと考えれらる。また、石のなかには加工のあとが見受けられるものや赤く焼けた石があり、結晶片岩なども埋積していた。ＳＤ－１自体の掘削の時期は不明であるが、埋積の時期は、出土した遺物から判断する限り14世紀が妥当であると考えられ、ＳＤ－１は東円寺跡85年－2区(9)・東円寺跡87年－1区(10)の調査で検出した溝とつながることが確認できた。



第6図　東円寺跡87年-5区土層模式図

② 溝 ＳＤ－２

ＳＤ－２は、調査区Ｈ１からＩ１に北から南に流れ、ＳＤ－１とＩ１で合流する幅1.5ｍ、深さ45㎝の溝である。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物は土師器・瓦器・東播系こねばち・瓦の破片などが出土している。



第７図ＳＤ－１断面図

ＳＤ－２は、ＳＤ－１とはほぼ同時期に掘削されたと考えられ、この２つの溝は、土地を区画するために掘られたものではないかと推察している。

③ 溝 ＳＤ－３

ＳＤ－３は、調査区Ｈ１からＨ３に東から西に流れる近世の溝で現在の土地区画にほぼ平行に存在し、ＳＤ－３の北側に現在の用水路がＳＤ－３と並走して存在する。また、ＳＤ－３については昭和60年の調査において掘削しており、遺構覆土は暗灰色粘質土で、遺物は伊万里の染付などを中心とした近世陶磁器が出土している。

④ ＳＤ－４

ＳＤ－４は、調査区Ｊ１からＪ２に存在する幅20㎝、深さ10㎝の溝状の鍬跡である。遺構覆土は灰色粘質土で、出土遺物としては土師器・瓦器片などが出土している。

⑤ 建物跡 ＳＢ－１

ＳＢ－１は、調査区Ｊ１・Ｊ２・Ｊ３・Ｋ１・Ｋ２・Ｋ３で検出した。規模は、梁間二間、桁行５間で、柱間は梁間が1.6ｍ前後で桁行が1.5ｍ前後を測る。遺物はＰit106より瓦器が出土している。時期は遺物から判断する限り13世紀頃と思われる。

⑥　柱列　ＳＡ－１

ＳＡ－１は、調査区Ｊ１・Ｊ２・Ｊ３で検出した。柱間は1.2ｍ前後を測る。遺物としてはＰｉｔ５より瓦器が出土している。

⑦　柱列　ＳＡ－２

ＳＡ－２は、調査区Ｆ３・Ｇ３で検出した。柱間は約90㎝前後を測る。遺物はＰｉｔ４より瓦器片が出土している。

⑧　柱列　ＳＡ－３

ＳＡ－３は、調査区Ｆ３・Ｇ３で検出した。柱間はＰｉｔ１とＰｉｔ２間が、2.3ｍで、Ｐｉｔ２とＰｉｔ３間が、4.6ｍを測る。Ｐｉｔ２とＰｉｔ３の間に攪乱が存在するが、Ｐｉｔ１とＰｉｔ２の間隔が、Ｐｉｔ２とＰｉｔ３の間隔のちょうど半分であることから攪乱内にもう一つ柱穴があったものと考えられる。遺物はＰｉｔ１及びＰｉｔ２が瓦敷きの柱穴で、布目のついた瓦が柱穴の底から出土している。Ｐｉｔ３からは瓦器の破片が出土している。

⑨　杭列　ＳＡ－４

ＳＡ－４は、調査区Ｈ１・Ｈ２・Ｈ３で検出した杭列で、近世の杭列と思われる。杭自体は腐敗してほぼ原形をとどめない。ＳＡ－４はＳＤ－３に並走するように杭列が並んでおり杭間は約80㎝前後を測る。

⑩　ＳＸ－１

ＳＸ－１は、調査区Ｊ２・Ｊ３で検出した不整形土壙で長軸４ｍ、短軸２ｍを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、炭の細片が含まれていた。遺物は瓦器の破片が少量出土している。

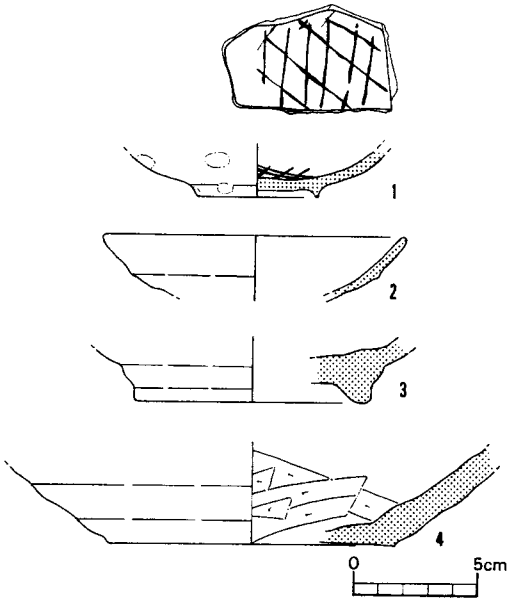
⑪　鍬　　跡

調査区全体で鍬跡と見られる大小の溝状の遺構を検出した。遺構覆土は灰色粘質土で、遺物は含まれていなかった。

第4節　出土遺物

①　ＳＤ－１の出土遺物（図版第１，第８図１～４）

ＳＤ－１からは、瓦器などの遺物が破片で出土した。図化できたのは４点である。1は瓦器椀で、底部のみの残存である。内面に斜格子暗文が施されており、外面にはケズリが施されている。2は瓦器椀で、外面は体部に一条のユビナデを施し、底部はケズリを加えてある。3は須恵質の鉢で、高台のみが残存している。高台外面には調整痕が一条みうけられ、内面にはろくろによるものと思われる調整痕がみうけられる。4は須恵質のこねばちの底部で、東播系のこねばちと思われる。外面には二条以上の調整痕がみうけられ、内面には多方向へのユビナデが施してある。



第８図　ＳＤ－１出土遺物(1)

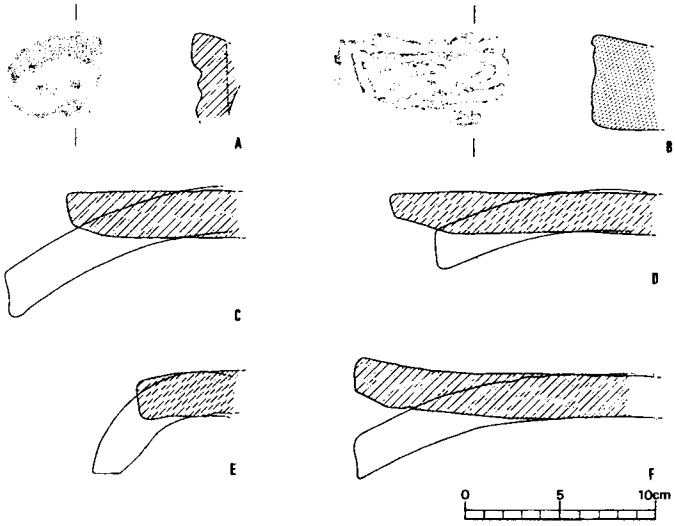
②　ＳＤ－１の出土瓦(図版５A•B•C•D図版第６E•F第９図A•B•C•D•E•F)

ＳＤ－１からは瓦の破片が多量に出土している。

Ａは巴文軒丸瓦の破片で周縁と珠文を含む破片である。全体的に摩滅が進んでいる。Ｂは唐草文軒平瓦の破片で、瓦当のみの破片である。調整はよみとれない。Ｃ・Ｄ・Ｆは平瓦の破片である。Ｃは２辺が残存している破片である。凸面はハナレズナが施されており、凹面は斜めにヘラケズリが施された後にユビナデが施され、端部にはヘラケズリが施されている。色調は黄灰色を呈し、焼成はやや軟である。Ｄは２辺が残存している破片である。凸面・凹面共にハレズナが施され、斜めにヘラケズリが施されている。凹面には一部圧痕がみうけられ、端部にはヘラケズリを施してある。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。Ｆは２辺が残存している破片で

ある。凸面はハナレズナが施されており、凹面は斜めにヘラケズリが施されている。色調は白橙色を呈し、焼成はやや軟である。

ＳＤ－１から出土する瓦片は殆どが二次的な焼成をうけているが、火災によるものかは現時点ではいずれとも決しがたい。今後、周辺の調査結果の蓄積を持って結論を出したい。

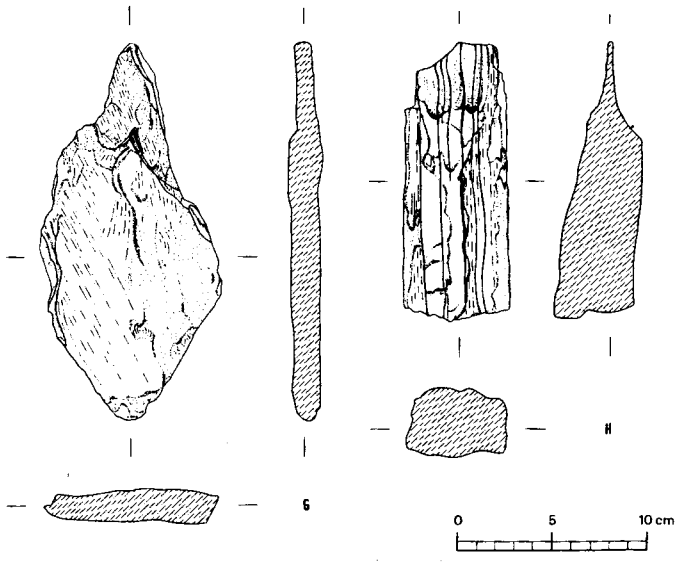


第９図　ＳＤ－１出土遺物(2)

③　ＳＤ－１その他の遺物（図版６Ｇ・Ｈ，第10図Ｇ・Ｈ）

ＳＤ－１から結晶片岩が２個出土している。結晶片岩は主に紀ノ川河岸で産出する石であるが、これらの２点の結晶片岩は搬入品と思われる。

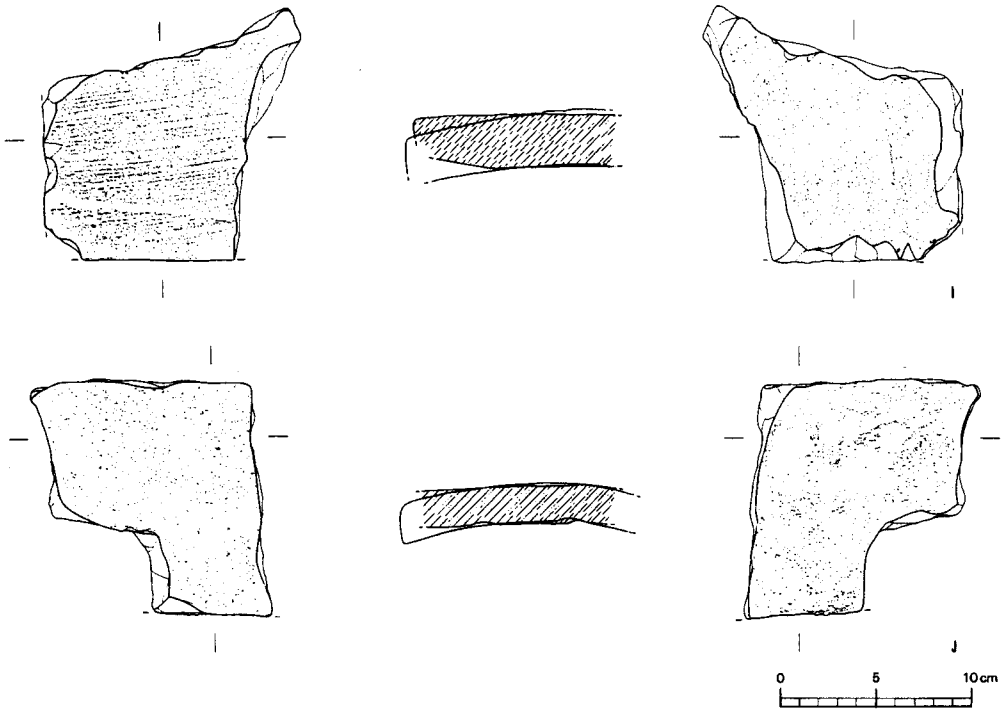
Ｇは厚さ約２㎝の板状の破片で、長軸 20.2㎝短軸 9.3㎝を測る。Ｈは厚さ約３㎝の破片で、長軸 14.8㎝短軸 5.3㎝を測る。両方とも加工した跡はみうけられない。



第10図ＳＤ－１出土遺物(3)

④　Pitの遺物（図版７Ｉ・Ｊ，第11図Ｉ・Ｊ）

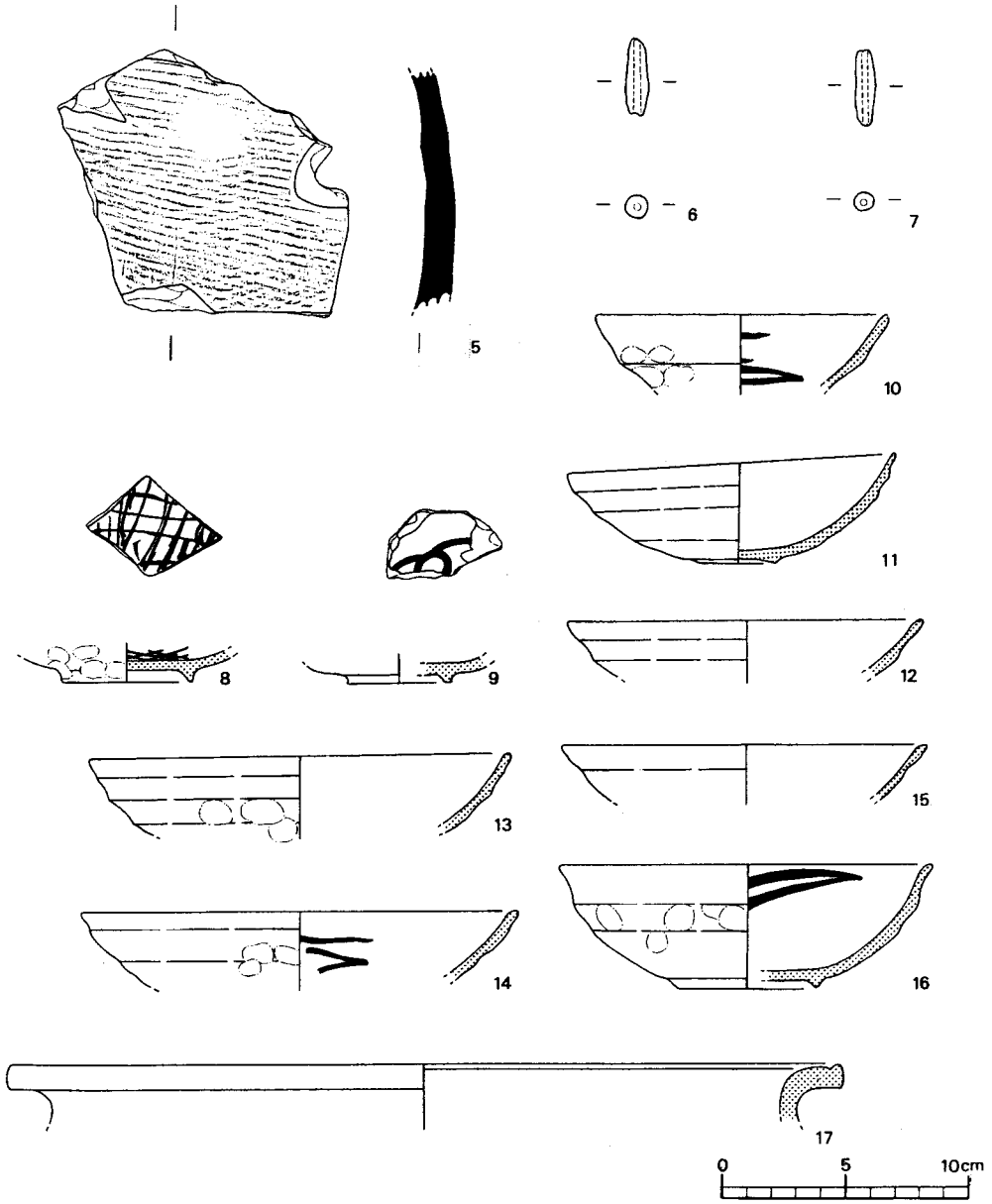
ＩはＰｉｔ１より出土した瓦の破片で、２辺が残存している破片である。凸面はナワタタキが施されている。凹面は斜めにヘラケズリが施されており、一部圧痕がみうけられる。端部にはヘラケズリが施されている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。ＪはＰｉｔ２より出土した瓦の破片で、１辺が残存している破片である。凸面はタタキが施されたのち粗いハナレズナが施されている。凹面は斜めにヘラケズリが施されており、一部圧痕がみうけられる。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。Ｉ・Ｊの瓦はいずれもＰｉｔの底より出土しており、根石の代用品として使用されたものと考えられる。



第11図Ｐｉｔ１．２出土遺物

⑤　包含層の遺物（図版第7　11，16，第12図　6～17）

5は須恵器の甕の破片で、体部のものと思われる。6・7は土錘であるが時期決定が困難である。8・9・10・11・12・13・14・15・16は瓦器椀である。8・9は底部の破片で8はみこみに斜格子暗文がみうけられ、9



第12図　東円寺跡87年－5区包含層の遺物

はみこみに螺旋暗文がみうけられる。10は外面体部に1条の調整痕内面には暗文がみうけられる。11は体部に2条の調整痕があり、高台は張り付けによるものである。12は外面に1条の調整痕がある。13は外面に2条の調整痕があり、一部ケズリを加えてある。14は外面に2条の調整痕があり、一部ケズリを加えてある。内面には暗文がみうけられる。15は外面に1条調整痕がある。16は外面に2条の調整痕があり、一部ケズリを加えてある。内面には暗文がみうけられ、高台の断面は逆三形を呈す。17は紀州系の羽釜の口縁と思われるが、残存する部分が微小であるので判断できない。

第5節　ま　と　め

本書では、大阪いずみ市民生活協同組合の店舗建築に伴う東円寺跡の調査について報告した。調査では、特に新しい知見こそなかったが、遺跡の実態を知る上で貴重な資料が得られた。今後の課題も含めてまとめておきたい。

今回の調査では、中世の溝と思われるＳＤ－1が、隣接する過去の2つの調査区において、既に検出されている溝とつながることが確認できた。また、中世の建物跡や鍬跡も検出され、隣接する調査区と同様に近世遺物を含んだ土層は存在しなかった。近世遺物は表土と近世の遺構であるＳＤ－3からのみ出土しており、出土遺物は14世紀までの遺物が大半を占めている。これらの状況から見る限り、当該地では13世紀から14世紀前半までは水田に接した居住地として利用されており、それ以後は居住地は廃絶し、耕地化がすすみ、水田・畑として利用され、水田を造成するために盛土と削平を繰り返しているものと思われる。集落の廃絶・耕地化の促進には、複数の要素が関連するものと思われるが、この点については、中家・降井家などの土豪の成立や集村化、東円寺の存在などが考えられる。今後も周辺で調査を実施し、データーを蓄積していくことが必要であり、更に『時代毎の土地利用の変遷』について考察・検討を重ねていく必要がある。今後も東円寺跡の調査と保存について十分な配慮を関係各位にお願いしておわりとしたい。

文末となったが、調査を実施していくうえで数多くの方々よりご教示、ご支援をいただいた。明記して感謝する次第である。

註

(1)『熊取町の歴史(1)』1976年3月熊取町教育委員会

(2) 藤沢真依　『東円寺跡発掘調査概要報告書・Ⅰ』1983年3月 大阪府教育委員会

(3) 芝野圭之介『東円寺跡発掘調査概要報告書・Ⅱ』1984年3月 大阪府教育委員会

(4) 佐久間貴士・井田　匡『東円寺跡調査概要・Ⅲ』1985年3月 大阪府教育委員会

(5) 松村隆文・森屋直樹『東円寺跡発掘調査概要・Ⅰ』1986年3月 熊取町教育委員会

(6) 井田　匡『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅰ』1987年3月 熊取町教育委員会

(7) 井田　匡『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅱ』1988年3月 熊取町教育委員会

(8) 註6 文献にて報告

(9) 註6 文献にて報告

(10) 註7 文献にて報告

第1表　遺物観察表

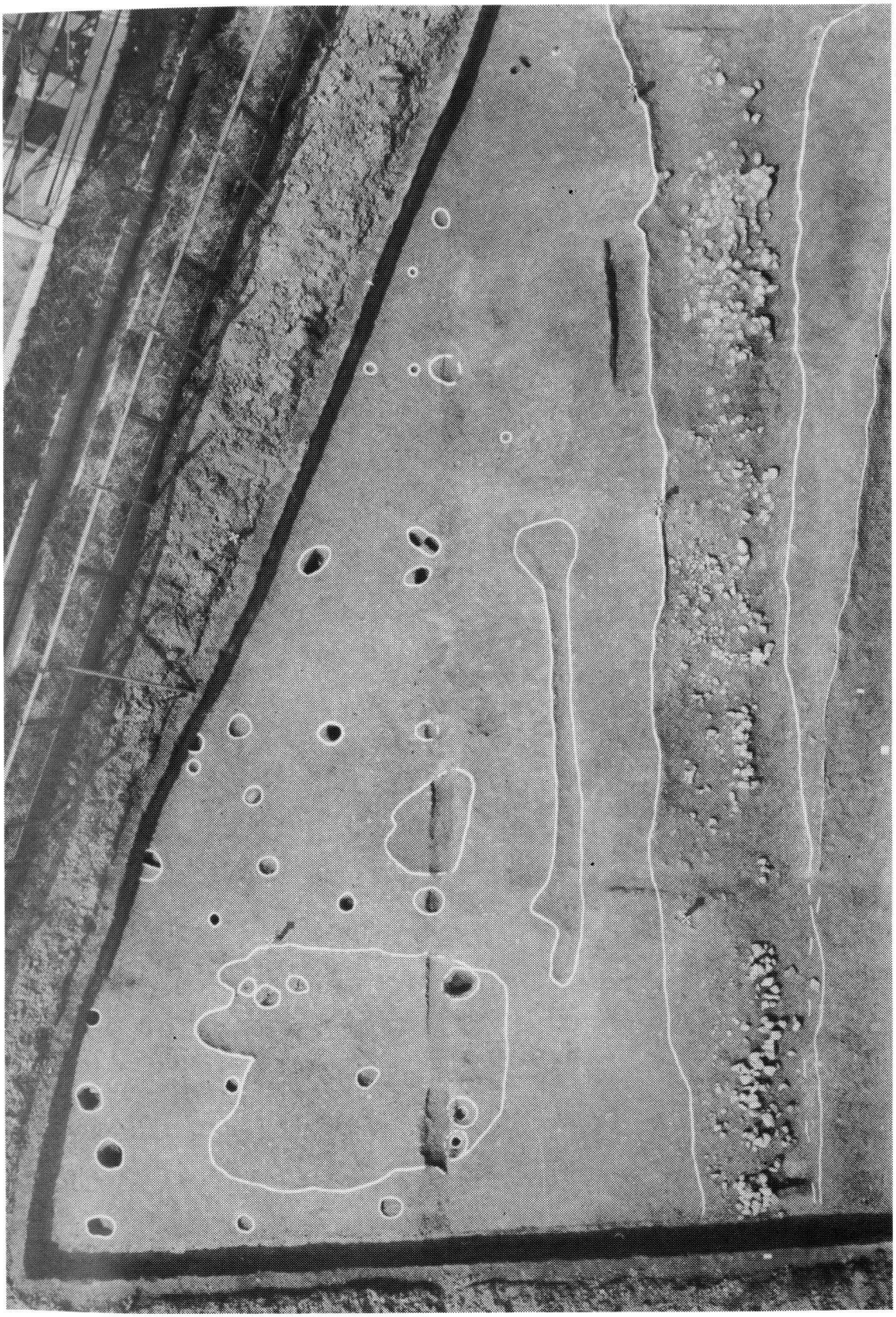
図番号	種類・器種	法量（cm）	記事	備考
8－1	瓦器　塊	反転底径：4.8 cm 立ち上がり高：1.7 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	内面に斜格子暗文 外面にケズリ
8－2	瓦器　塊	反転口径：12.1 cm 残存高：2.5 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	外面　ユビナデ
8－3	須恵質　鉢	反転底径：10.0 cm 残存高：1.9 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　灰橙色	
8－4	須恵質 こね鉢	反転底径：11.5 cm 残存高：4.1 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	外面に自然釉 内面に調整あり
9－A	巴文軒丸瓦	周縁の幅：1.5 cm 瓦当の幅：11.0 cm	胎土 粗0.5～2.0㎜程の粒を含む 焼成　軟　2次焼成か? 色調　暗灰色	
9－B	唐草文軒平瓦	瓦当面の幅：4.8 cm	胎土　良好 焼成　軟　2次焼成か? 色調　明茶白色	
9－C	平　瓦	残存長軸：12.5 cm以下 残存短軸：9.1 cm以下	胎土　良好 焼成　やや軟 色調　淡暗灰	凹面に指頭圧痕 凸面にハナレズナ
9－D	平　瓦	残存長軸：14.2 cm以下 残存短軸：11.2 cm以下	胎土　良好 焼成　軟　2次焼成か? 色調　暗灰色	ハナレズナ
9－E	丸　瓦	残存長軸：7.1 cm以下 残存短軸：5.4 cm以下	胎土 良好 0.1～1.0㎜の粒を含む。 焼成　軟　2次焼成 色調　黒灰色	
9－F	平　瓦	残存長軸：15.9 cm以下 残存短軸：14.4 cm以下	胎土　良好 焼成　やや軟　2次焼成か? 色調　凹 白橙色 凸 黒灰色	凹面にナナメ方向にヘラ調整 凸凹面にハナレズナ粗
10－G	結晶片岩	長軸：20.2 cm以下 短軸：9.3 cm以下	色調　暗灰色	
10－H	結晶片岩	長軸：14.8 cm以下 短軸：5.3 cm以下	色調　灰青色	
11－I	平　瓦	残存長軸：17.2 cm以下 残存短軸：13.2 cm以下	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	凹面に指頭圧痕 ヘラミガキ ヘラケズリ 凸面にナワ目
11－J	平　瓦	残存長軸：17.3 cm以下 残存短軸：10.4 cm以下	胎土　良好 焼成　やや軟 色調　暗灰色	凹面に指頭圧痕 凹凸面にハナレズナ粗
12－5	須恵質　甕	残存長軸：13.9 cm以下 残存短軸：9.9 cm以下	胎土　良好 焼成　良好 色調 外面:淡暗灰色(やや緑っぽい) 内面:灰色	内面に調整のあとあり
12－6	土　錘	最大寸：3.2 cm 最大外径：1.0 cm	胎土　良好 焼成　良好 色調　明橙茶色	

図番号	種類・器種	法　量（cm）	記　事	備　考
12－7	土　錘	最大寸：3.1 cm 最大外径：0.8 cm	胎土　良好 焼成　良好 色調　桃茶色	
12－8	瓦器　椀	反転底径：5.2 cm 残存高：1.3 cm	胎土　良好 焼成　良好 色調　内面：暗灰色 外面：灰色	内面に斜格子暗文
12－9	瓦器　椀	反転底径：4.3 cm 残存高：1.0 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	内面にら旋暗文がある
12－10	瓦器　椀	反転口径：12.0 cm 残存高：3.0 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	内面　暗文
12－11	瓦器　椀	口径：13.4 cm 底径：3.0 cm以上 器高：4.5 cm	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	椀がゆがんでいる
12－12	瓦器　椀	反転口径：14.4 cm 残存高：2.3 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	
12－13	瓦器　椀	反転口径：17.0 cm 残存高：3.2 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	
12－14	瓦器　椀	反転口径：17.6 cm 残存高：3.1 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　内面：灰色 外面：暗灰色	内面に暗文
12－15	瓦器　椀	反転口径：14.8 cm 残存高：2.3 cm以上	胎土　良好 焼成　良好 色調　淡暗灰色	
12－16	瓦器　椀	反転口径：15.1 cm 残存高：5.1 cm	胎土　良好 焼成　良好 色調　暗灰色	内面に暗文
12－17	紀州系羽釜	反転口径：33.3 cm 残存高：2.4 cm以上	胎土 良好 0.5～2.0㎜の粒を含む 焼成　良好 色調　赤橙色	

図　　版

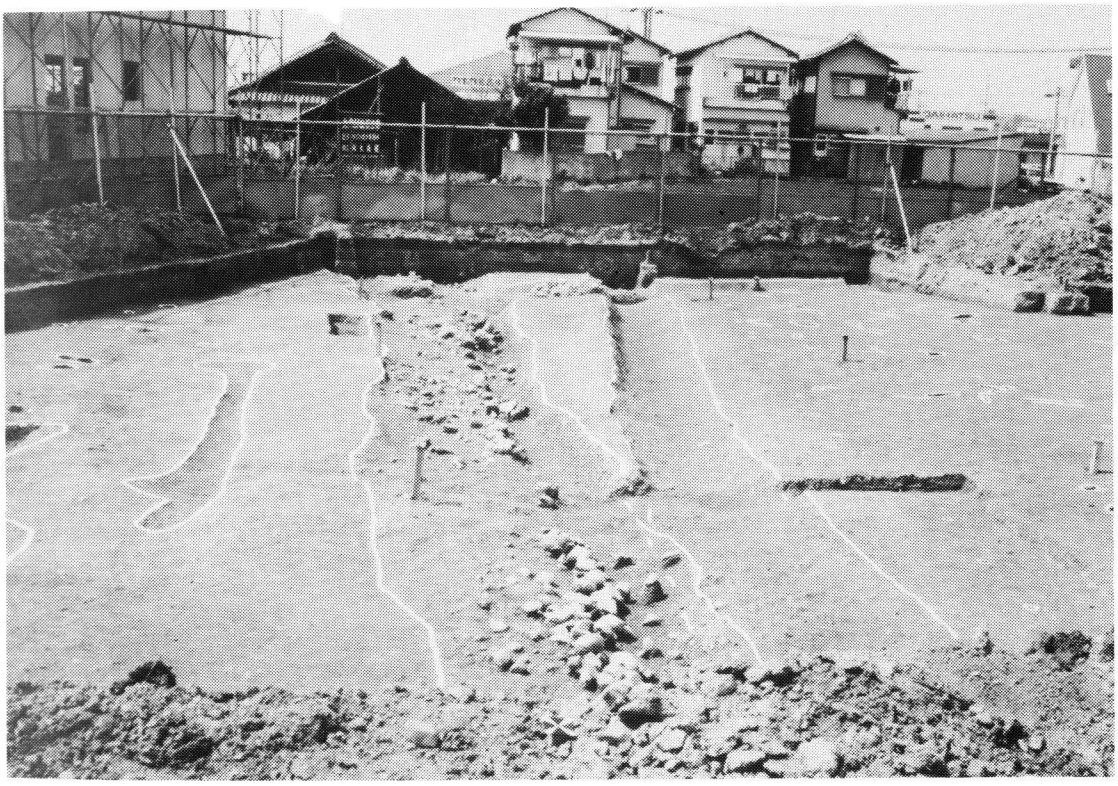
図版第一　調査地全景

図版第二　SD－1・SD－2・SD－3検出状態



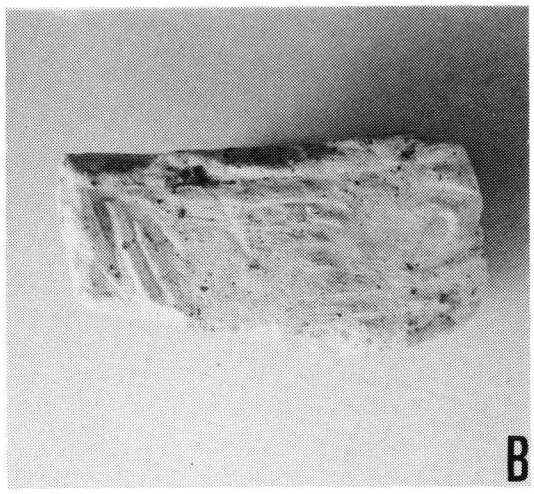
図版第三　SD－1及びSB－1検出状態

調査地全景（上が北）

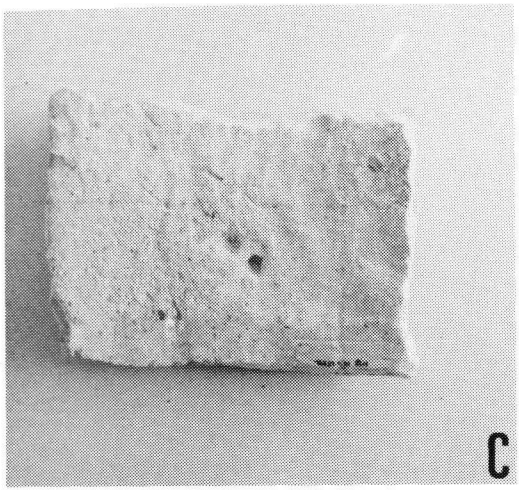


遺溝検出状態（東から）

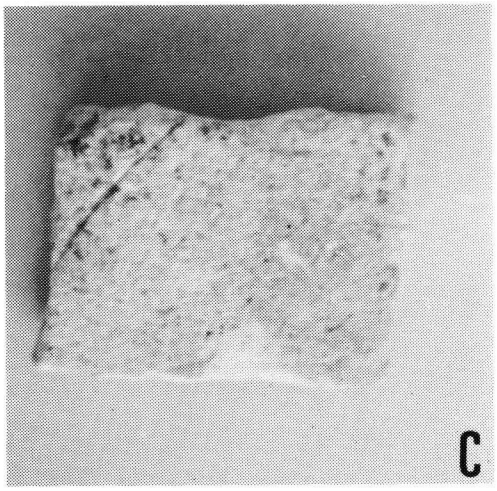
巴文軒丸瓦瓦当（破片）



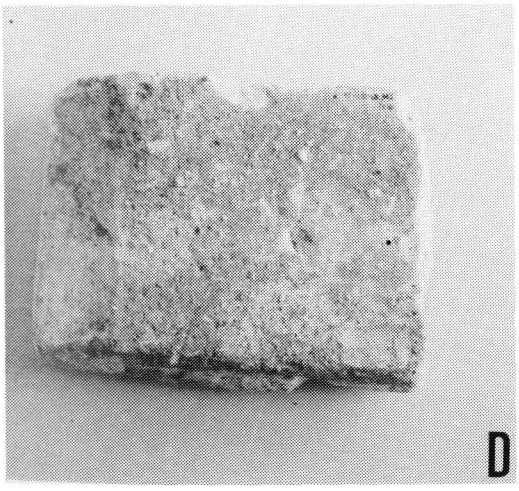
唐草文軒平瓦瓦当（破片）



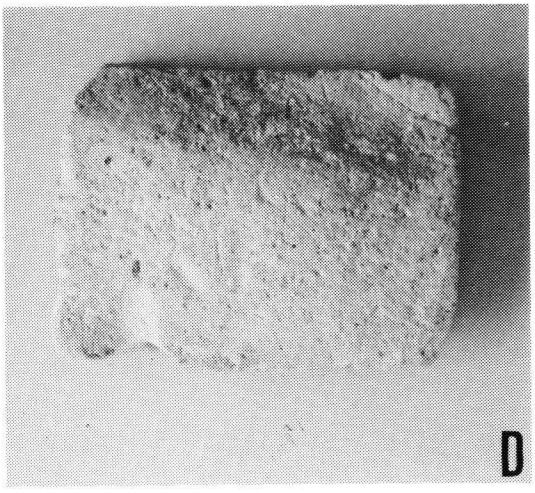
平　瓦（凹面）



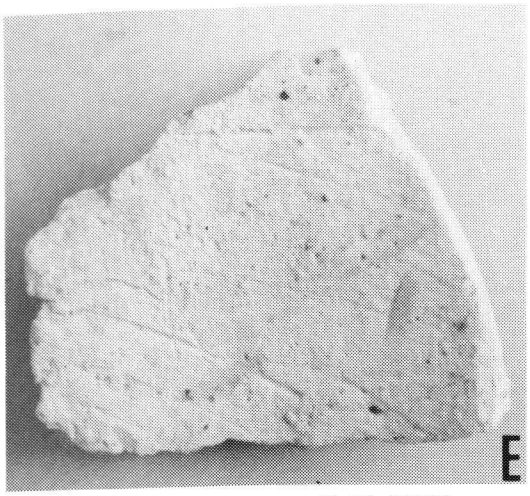
平　瓦（凸面）



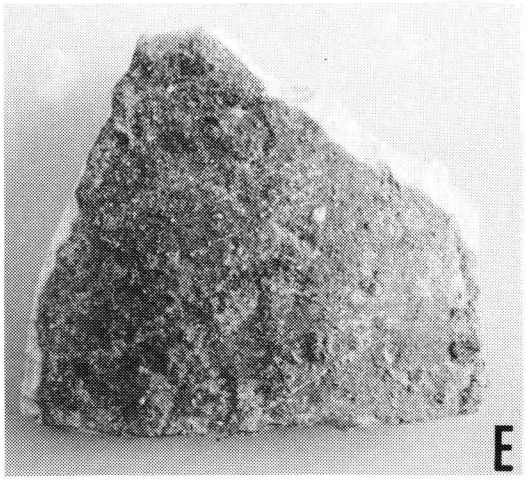
平　瓦（凹面）



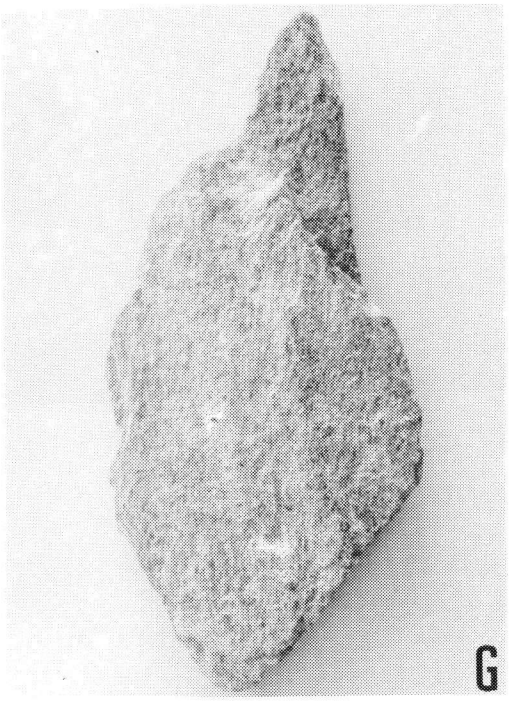
平　瓦（凸面）



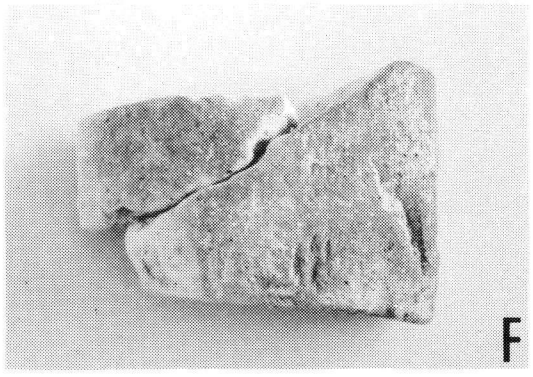
平瓦（凹面）



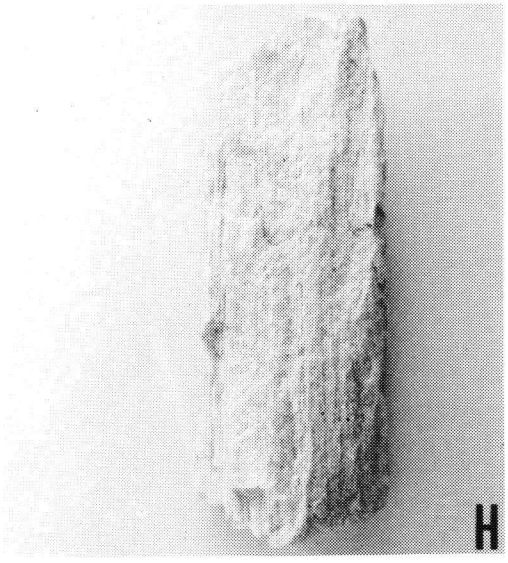
平瓦（凸面）

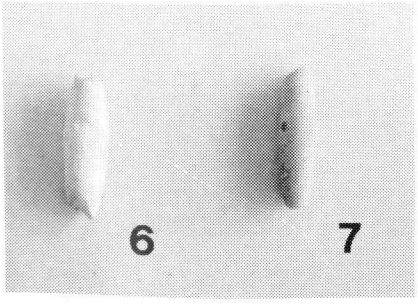


結晶片岩



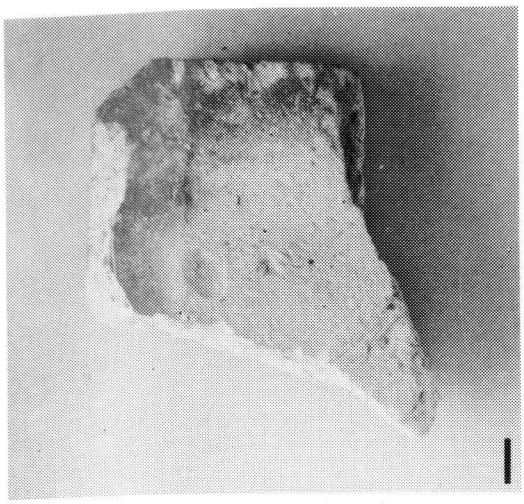
丸瓦（凸面）



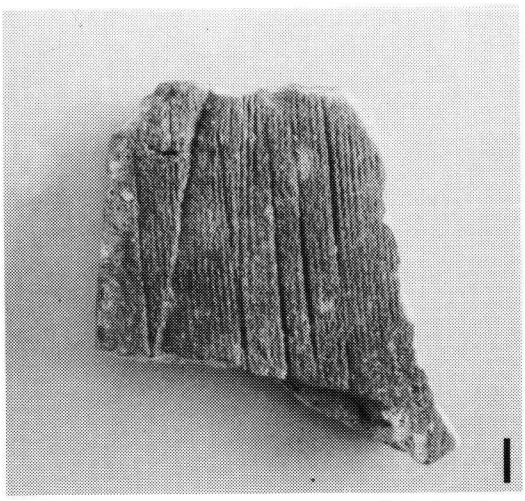


土錘

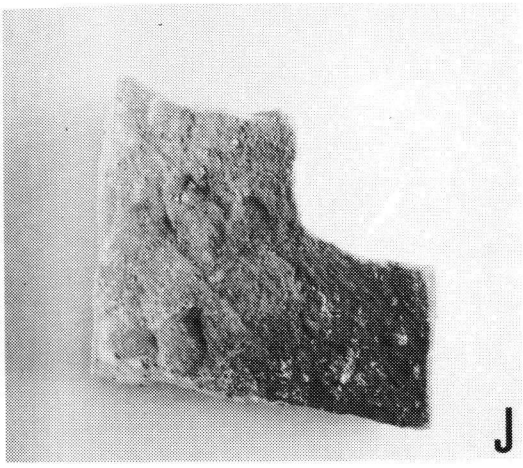
図版第七　出土遺物(3)



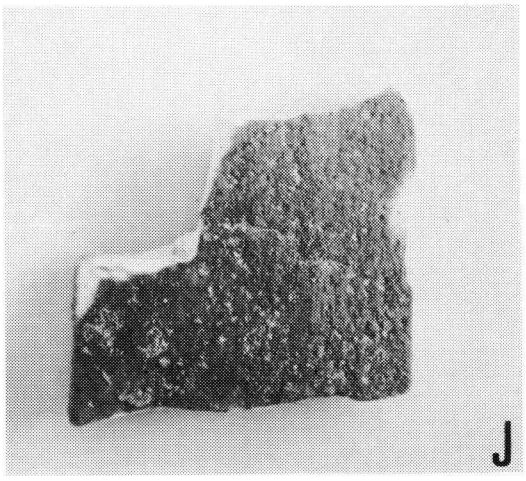
Pit 1 出土平瓦（凹面）



Pit 1 出土平瓦（凸面）

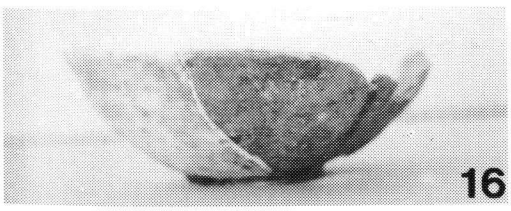


Pit 2 出土平瓦（凹面）

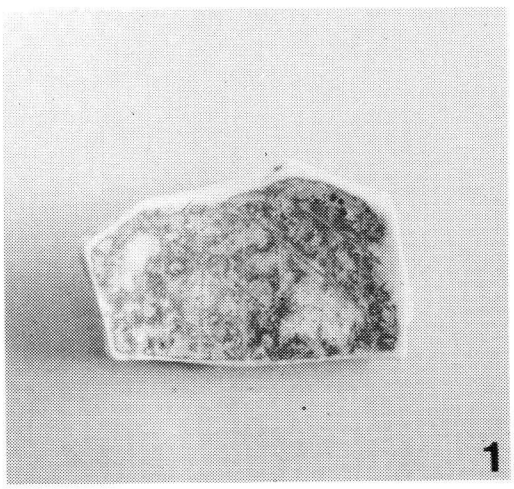


Pit 2 出土平瓦（凸面）

瓦 器 埦

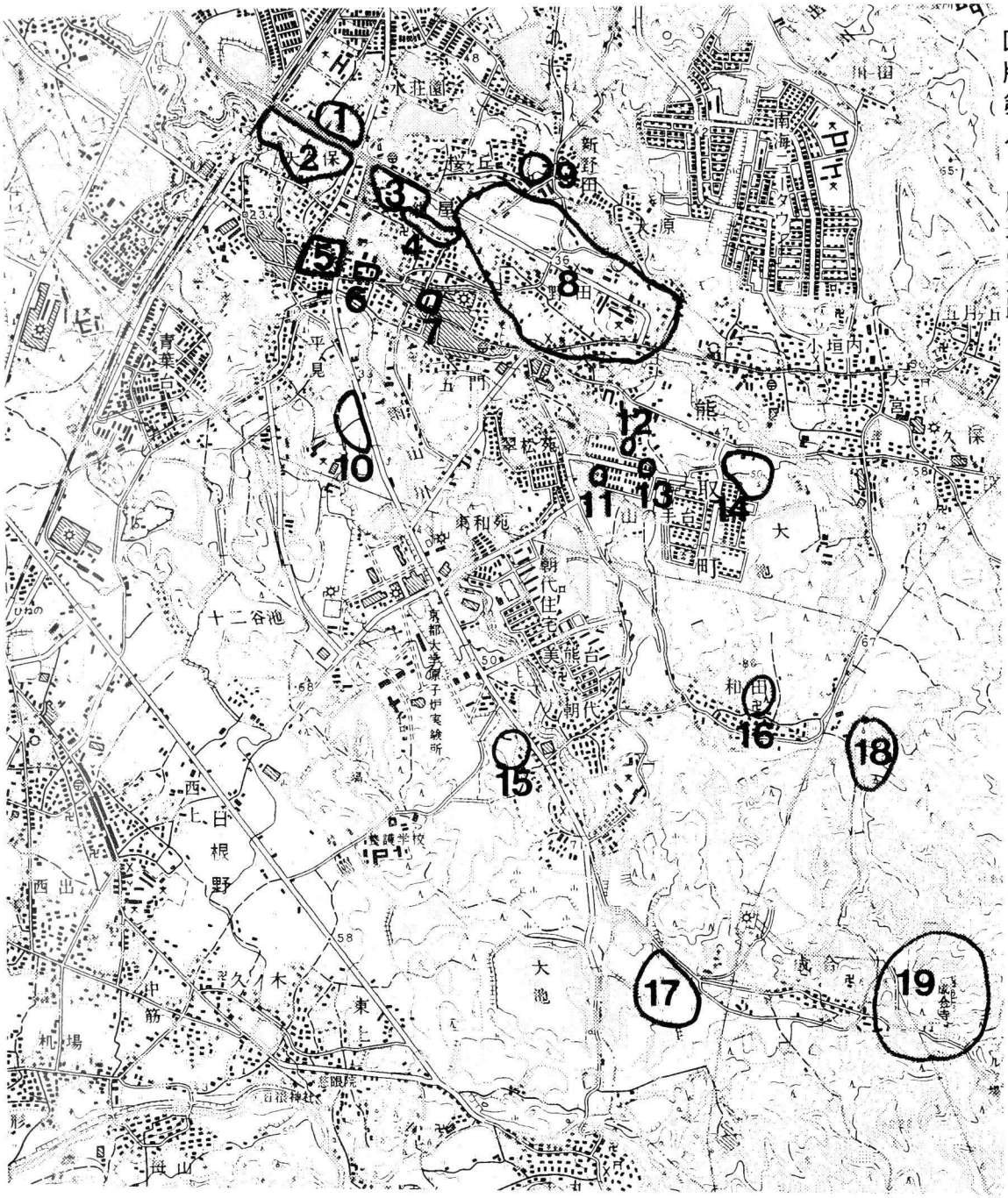


瓦 器 埦



瓦器破片（斜格子暗文）

図版第八　周辺の遺跡



1．大久保Ｄ遺跡　2．大久保Ｂ遺跡　3．紺屋遺跡　4．口無池遺跡

5．降井家屋敷跡　6．大久保Ｃ遺跡　7．中家住宅　8．東円寺跡

9．祭礼御旅所跡　11．五門遺跡　12．五門北古墳　13．五門古墳

14．大浦中世墓地　15．山の下城跡　16．来迎寺本堂　17．池の谷遺跡

18．墓の谷遺跡　19．成合寺遺跡